日吉台新聞
HIYOSHIDAI
発　行
日吉台学区自治連合会
日吉台学区
まちづくり協議会
発行責任者
林　堅太郎
編集責任者
村澤　真保呂

支所は24年度までは存続

市見直し案・窓口業務は一部縮小

大津市の支所削減案について同市は２月１日、市自治連合会に対し、これまで素案として提示していた支所削減案を見直し「２０２４年度までは全支所を存続させる」とする新たな方針案を発表した。見直し案では、支所存続ほか、職員も配置するとしているが、日吉台支所など多くの支所では、窓口業務の見直し、窓口業務時間の短縮などの住民負担を求めており手放しでは喜べない内容となっており各学区で論議を呼びそうだ。

市は、29年暮れ、市民センターあり方検討のなかで、現在の36支所を32年度中に10支所に統合する支所再編、集約化計画を決め、素案として発表した。この素案では日吉台支所は、同じ中北ブロックの雄琴、下阪本、唐崎支所とともに坂本支所へ統合されることになっている。素案提示後、統合、集約となる支所を持つ学区を中心に反対運動がおき、市自治連合会の谷正男会長ら市自治連役員らが越直美市長らはじめ市側と折衝を重ねた。

市自治連側と折衝するなか、越市長ら市側は、素案見直しの方針を示したうえ、各学区ごとに住民の意見を聞く説明会を開催するなど「よりよい案提示」に向け代替案をづくりを進めてきた。

今回提示された見直案で、日吉台支所は、２０２４年度まで支所として残り、職員は配置される。窓口業務は、住民票の写し、印鑑証明、所得証明の発行業務、保険、年金、介護など福祉サービスの届け、相談は取り扱うが、戸籍謄本、抄本等の各種証明書発行、戸籍、住民基本台帳の届け出、市税に関する届け出、公共料金の取り扱いは廃止となる。これら取り扱い窓口時間は、午前９時から午後３時までで、窓口業務取り扱いは、従来より時間短縮となる。

来年４月からの実施で、２０２３年で再見直しを検討するとなっている。見直しの実施で支所職員の削減が必至。前回の素案では約４億２０００万円のコスト削減を見込んでいたが、今回の見直しではコスト削減効果は６億４８００万円に増えるという。（**写真は、日吉台市民センター**）

コミュニティ基金説明会

通常総会に提案を予定

学区自治連合会は１月27日、日吉台市民センター大会議室で、学区コミュニティ基金を各自治会に分配する「日吉台学区コミュニティ基金取り扱い」（案）についての住民説明会を開いた。説明会には学区住民約50人が出席、取り扱いについて賛否両論、熱い議論が交わされたが、学区自治連は「４月開催の学区自治連通常総会に議案を提示する」と改めてコミュニティ基金配分に理解を求めた。

学区公共下水道整備のさいの住民負担金が原資の学区コミュニティ基金の残金約３４００万円については、下水道整備当時の負担者の還付や自治会への分配、そのまま学区自治連合会コミュニティ基金での継続維持など住民の間で、さまざまな意見が出てこの取り扱いは長年の懸案事だった。

今回示されたコミュニティ取り扱い案は、コミュニティ管理の基金を８丁自治会に一定額を分配、各自治会の自治会館維持や防災、自治会活性化等に役立ててもらうもの。学区コミュニティ管理委員会で協議を重ねたすえ各自治会に分配することで意見が一致、昨年５月に学区自治連合会に答申案として提示した。答申を受け学区自治連合会は、各丁に対し協議と可否判断を要請。各丁から昨年10月までに「答申案を了承する」との回答があり、学区自治連合会は１月の学区自治連合会通常総会に配分案を議案として提出することを決めている。

住民説明会では、野々口義信・学区自治連合会会長、近原秀明・学区コミュニティ基金管理委員会委員長らが出席、野々口会長、近原委員長が「各丁や住民のみなさまの了解があったものと判断、総会に提案するもの」と述べ、配分に至った経過や提案理由を説明。丸山郁夫・学区自治連合会事務局長の進行で、住民との質疑応答を行なった。

住民側から、「配分方法や住民提示から総会提案まで早急すぎる」「自治連に基金を残す必要はない」「連合会で決定し住民に案を押し付けている」など、慎重意見や分配率に反対の声があった反面「しっかりと話し合いをしている。学区自治連合会としても各丁とキャッチボールを十分していた。問題はない」、「分配案は妥当な数字だ。各会員に議事録を回覧したが反対されたことはない。案を支持する」と提案に賛成意見も出された。

２時間に及ぶ質疑のなか、学区自治連は「住民への提案事項については、周知、進め方については改善してゆく。今回の提案については総会に提出する」と述べ、説明会の議論を締めくくった。

「住」の悩み解決します

「住まいの相談窓口」開設

学区空き家対策委員会は、学区住民が抱える「住」に関する問題や課題など、住民の悩みを解決する「住まいの相談窓口」を開設した。

学区空き家対策委は、対策事業を学区のまちづくりと捉え、空き家現況調査、空き家見守り活動、「ずっと　もっと住みつづけたい」日吉台をめざす勉強会やまちづくりのワークショップの開催などの活動を続けてきた。

これまでの勉強会や対策委の協議のなかから、相続や税対策、修理や建て替え問題など住民たちが「住」に関するさまざまな問題、悩みなどを抱えることが分かりこの「住まいの相談」窓口を開設することにした。

相談には、１級建築施工管理技師や土地家屋調査士、宅地建物取引主任者、行政書士ら空き家対策委の専門委員が担当、アドバイスする。全住民を対象としている。

同委は昨年暮れ、住まいの相談ほか、学区内に点在する空き家の小修理を担う「日吉台学区空き家見守り隊」（岸本善春代表）を発足、活動を始めている。見守り隊は、原則空き家所有者の依頼を受け、公的な手続き、特殊な機器、特別な資格等を必要としない修繕・修理を有料で行う。作業費は１時間一人１０００円程度、見守り依頼や住まいの相談は空き家対策委の濱崎博事務局長（０９０－５０５３－５４５５）まで。

日吉台学区
個人情報保護方針
取り扱い文書

伝統文化へいざなう

喫茶去の会　こども茶道教室

日吉台小の児童、茶の湯の魅力体験

日吉台市民センター和室で、我が国の伝統文化、茶道の世界に子どもたちをいざなう「喫茶去（きっさこ）の会　こども茶道教室」が開かれている。この茶道教室は、２丁目北在住の布川麻理さんが、平成29年、日吉台の子どもたちに茶道を通じ豊かな心や感性を育ててもらおうと文化庁の伝統文化親子教室事業の支援を受けはじめたもので現在日吉台小男女11人が、茶の湯の魅力を体験している。

布川さんが小学生のころ、京都市内の近所に茶道の先生が引っ越して来て、興味を持ち習いにいったのが、茶道の世界にふれるきっかけ。京都では教育関係公務員していたが　退職後、東日本大震災のボランティアに出かけた。

被災地の惨状に胸をいためたが、被災した人たちとお茶を飲みながら話しをする「お茶っこ」という機会があり、お茶を通じて被災地の人たちとの話しの輪が広がった。そこは子どものころに通ったお茶室と同じ非日常的な空間と時間、落ち着く場所。次代に担う子どもたちにも茶道の体験をして欲しいと思うようになり日吉台でも地域でこのような場が設けられればと考えていた時、知人が文化庁の伝統文化親子教室事業に参加していることを知り応募、日吉台でのこの子ども茶道教室が実現した。

「喫茶去」とは、立場や境遇に分け隔てなく温かいもてなしの心で「さあお茶を差し上げましょう」という意味の禅語。

スタッフは、布川さんら7人。子どもたちは、お茶の点て方、作法だけでなく掛け軸の意味を知り、季節の花を感じ実際に花入れをするなど伝統の世界の入り口を体験。今では和室のしつらえや歩き方、道具の運び方なども学びながら落ち着いて丁寧に取り組めるようになっている。布川さんは「なんといっても子どもたちは、季節の和菓子とお茶をいただくことが楽しみ。中学生の参加希望者も教室に迎えたい」と意欲をみせている。

市民センターで茶道を学ぶ子どもたち

日吉台の桜守り

ボランティアで枝折れ防止

高橋川沿いの桜の枝折れ防止作業

日吉台の桜の名所、高橋川沿いの桜並木を守るため岸本善春さんら3丁目西在住の3人が枝折れ防止作業をしている。

同川沿いには、日吉台が開町以来、ソメイヨシノが植えられ、シーズンになると美しい桜並木を演出、学区民を和ませている。以前から大きな枝が垂れ下がり、枝折れなどを起し桜の木の寿命を縮めていたが、昨年の台風21号の襲来で枝折れ被害に拍車がかかっていた。ボランティアで作業をしているのは、岸本さんほか、清水彰さん、村田雅夫さんの3人。このまま放置したもの。3人は、垂れ下がるソメイヨシノの枝を下から2㍍のところに支柱を取り付けたり、上部の太い枝から針金で吊り下げたりして一本一本丁寧に枝折れ防止を進めている。岸本さんらは「枝折れ防止作業のほか、幹には青い花のような苔がたくさん生えている。木を守るためこの苔おとしの作業も順次実施したい」とはなしている。

田川・日吉中校長らが特別授業

日吉台小で

日吉台小に2月18日、田川学日吉中校長と牧田衛活びわ湖放送アナウンサーが訪問、同小6年生23人を対象にした特別授業「聞くこと・話すこと」を行った。

特別授業では、「朝の食卓の風景」や「父と娘の会話」など田川校長が事前に用意した台本、4場面の寸劇を6年生の子どもたちに演じてもらい、田川校長が、子どもたちに寸劇の会話の中から誰のどんなところの会話がおかしいかを話し合わせ、子どもたちは、話し手の意図を考え筋道立てて話しを聞くことの大切さを学んだ。

続いて牧田アナウンサーが登場、子どもたちは、同アナウンサーの話を聞き、人に分かりやすく伝えるための工夫をみんなで考え、効果的な話し方について勉強した。

この特別授業の様子は、びわこ放送の番組「きらりん滋賀」で紹介された。

日吉台小で特別授業をする田川・日吉中校長。左は牧田・びわ湖放送アナウンサー

従来どおり土足禁止

市民センター

大津市が市民センター建物への土足入場を検討している問題で、日吉台支所の安孫子昌治支所長は、2月16日開いた学区自治連合会定例会で「市民センター入館は従来どおり土足禁止とする」と述べ、市民センターの利用は、現状の利用方法を継続させる方針を市自治協働課に報告、了承されたことを明かにした。

大津市に対し、車イス利用者から公共施設を戸外からそのまま車イスで館内に入場できないか、との要望や指摘があり、市自治協働課が、昨年暮れ36支所の建物について一般利用者の土足利用も含め土足解禁が可能かどうか調査。結果、日吉台市民センターでは、実質土足で入れるのは、廊下部分だけしかないことが判明。市自治協働課に対し現状のままとすることを報告、了承された。

指摘のあった車イス利用者のついては、そのまま館内入場を可能とした。